

筑波大学の家具・家電等リユースプロジェクト 「3E EcoCycle」

青年シンクタンクRHO 山本 泰弘

1. 学生宿舎の家具・家電問題

年度替わりの時期を迎えると、進学・就職・転勤などで日本全国引越しラッシュとなります。大学もまた然りで、特に千戸単位の学生宿舎を有し、キャンパス近隣に下宿する学生の多い筑波大のような大学では「大移動」の有様です。

そこで問題となるのが、廃棄される大量の家具・家電。宿舎やアパートを出る学生等が、まだ使える品物を処分する一方で、新入生は新生活用品を買い揃えるという行動が常態化しています。リサイクルショップやSNS、フリマアプリ等を活用してリユースする学生も少なくありませんが、他方で不法投棄や怪しい回収業者に流してしまうことも多いのが実態です。

これらにより、多大な環境負荷はもたらること、学生に経済的損失が発生し続けているのです。家具・家電を購入する出費は、経済力に乏しい新入生や留学生にとって痛いダメージです。

2. 答えは見えている、しかし…

「卒業生からまだ使える家具・家電を引き取って、新入生にあげればいいんじゃない?」。この解決策は誰もが思いつくのではないのでしょうか。しかしそれを現実化するのにはなかなか難しいのです。

各地の大学で、学生サークルや大学生協の学生委員会による家具・家電リユース活動が行われてきましたが、継続できず消滅してしまうことが少なくありませ

ん。仕事量の多さのために春休みを拘束することになり、運営する学生が集まらないことが主な理由と考えられます。

それらの活動は多くの場合、学生メンバーが家具や家電の引き取りを希望する卒業生等の自宅を軽トラックなどで回り、学内の保管場所に持ち帰るという方法をとっています。それらを新入生へ提供する際も、フリーマーケットのように広い会場に品物を並べ、一定のルールのもと引き取り手を決めるといった大掛かりなイベントを開く(“フリマ方式”)とすることが多いのです。さらに希望者には配達してあげる場合も。

昔からのやり方を引き継いでいると思われませんが、これでは人手がいくらあっても足りません。筑波大学においても2005年と2013年の2度、活動が断絶した歴史があります。

3. 社会実験

そこで2015年、私と学生たち合わせて5名ほどのチームは、徹底的に合理化した家具・家電リユース活動を企画し試行しました。そのポイントは次の3つです。

①集積拠点に品物を持ち込んでもらう：私たちは学生宿舎の空きフロアを品物の集積拠点とし、譲り手にそこへ品物を持参してもらうこととしました。一人で持ち運びできない大型の品は対象外としました。訪問回収や貰い手への配達には行きません。それでも、新入生のために提供したいという卒業生・在



写真1 プロジェクトメンバーと、テレビを獲得した新入生(中央)

学生が多く品物(計168点)を提供してくれました。

②品物の写真をブログに載せ、コメント機能で希望を受け付け、抽選で貰い手を決定する：筑波大でのリユース活動では以前から、“フリマ方式”ではなく、集まった品物をWeb掲載し、あらかじめ抽選で貰い手を決める方法(“懸賞方式”)をとっていました。従来は学生がサイトを自作していましたが、今回は一般のブログサービスを利用することで省力化しました。当選した新入生には所定の日時に集積場所で品物を渡しました。

③学生サークル等と取り引きし、スタッフを確保する：私たちは大学公認のプロジェクトとしていち早く新入生に接触できることを活かし、大規模サークルに比べPR力の弱い小規模サークルに、「新入生向けサークルガイド(ブログに掲載・冊子で配布)に掲載すると引き換えに、作業を手伝っていませんか?」ともちかけました。これにより協力者を集めることができ、無理なくプロジェクトを運営できました。

以上の方策により、中心メンバー5人ほどで100点単位の品物をリユースすることができました(写真1)。

4. 「リユース2.0」へ

リサイクルショップやSNSがあっても、学生間のリユース活動のニーズがなくなることはないでしょう。昔のやり方にとらわれるのではなく、イノベーションを加えて進化させた家具・家電リユース活動が各地域で続いていくことを望みます。



マスコットキャラクター「えこさいくるん」